

ベルマーク新聞 9月号

発行 公益財団法人ベルマーク教育助成財団 東京都中央区築地5-4-18 汐留イーストサイドビル7階 〒104-0045 電話 03-5148-7255(代表) 郵便振替口座 00100-7-56035
大阪事務所 大阪市北区中之島2-3-18 朝日新聞大阪本社内 〒530-8211 電話 06-6231-0131 ダイヤルイン 06-6201-8031 ホームページ <http://www.bellmark.or.jp/>

地震、雪崩…災害から身を守るには

大阪・郡津小学校で第1回防災科学教室



ベルマーク財団と国立研究開発法人防災科学技術研究所が協力して今年度から実施する「防災科学教室」の第1回が8月30日大阪府交野市立郡津(こうづ)小学校(恒松小百合校長)で開かれ、3、4年生の児童約200人が参加しました。

講師は、防災科研の研究員のDr. ナダレンジャーこと納口恭明(のうぐち・やすあき)さんと、助手の「ナダレンコ」こと罇優子(もたい・ゆうこ)さん。金髪のかつらにつけひげ、地下足袋姿のナダレンジャーは「不審者ではありません、雪崩(なだれ)の専門家で、こう見えても博士です」と挨拶。どっと笑い声がおきました。

穴のあいたバケツを使って圧縮した空気を飛ばす「突風マシン」、膨らませた長いビニール袋に発泡スチロール粒を入れて雪崩の様子を再現する「ナダレンジャー0号」など、様々な道具が登場します。「災害を起こす自然現象も、ミニチュアにすればおもちゃになります。反対に楽しい実験もスケールが大きくなると災害になるんだよ」

地震時にマンホールのふたが地上に飛び出たりする液状化現象の説明には、ペットボトルで作る「エッキー」を使います。頭の丸いマップピンと砂、水が入っていて、振ってからしばらく置き、ペットボトルの横を軽くはじくと、砂に沈んでいたマップピンが浮き上がってきます。

長さが違う3つの細長いスポンジをビルに見立てた「ゆらゆ



ら」では、地震の際の揺れ具合の違いがわかります。素早く揺らすと一番短いスポンジが揺れ、ゆっくり揺らすと長いスポンジだけが揺れるのを見て、子どもたちはびっくり。「地震の波の違いによって揺れ方が変わるんだよ」

最後に発泡スチロールのブロックを高く積んで、地震でブロックが崩れる様子を再現。6月の大阪府北部地震でブロック塀が倒壊し子どもが亡くなった例を挙げて、「みんなも危ないと思ったらすぐ逃げてね」と力を込めました。

45分の授業の中で、ナダレンジャーは何度も繰り返しました。「大災害にあったら守ってくれる人はいません。自分で自分を守るようになってください」。授業が終わり、素顔に戻った納口さんと罇さんは、一人ひとりと笑顔でハイタッチ。平井肇教頭先生は「子どもたちが本当に楽しんでいる様子が伝わってきました」と感想を述べました。

郡津小は今年創立50周年。卒業後も校区内に住み、2世代で同小という家庭も多いといえます。昨年度のPTA副会長の林ミドリさんもその一人で「ベルマークは私が子供の頃から集めています」。50周年記念実行委員会・事務局長の山崎信彦さんは「日頃みんなが頑張っているベルマークと一緒に記念になる事ができたらと考え、今回の企画が実現しました」と語りました。



(左上) 発泡スチロールが雪崩のように降ってきたら…

(左文中) Dr. ナダレンジャーとナダレンコさん

(右上) ブロック落下実験

(右下) 最後は笑顔でハイタッチ

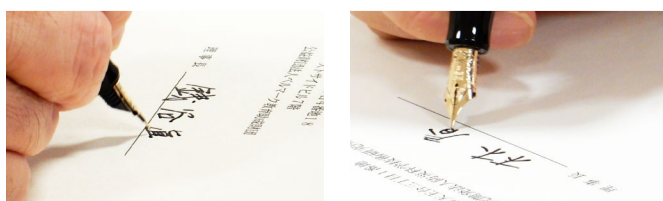
財団と防災科学技術研究所が協定

「教室」実施で

ベルマーク教育助成財団(銭谷眞美理事長)は8月9日、国立研究開発法人防災科学技術研究所(林春男理事長)と、「防災科学教室」の実施についての包括連携協定を結びました。財団の銭谷理事長と、防災科研の林理事長が、それぞれ協定書にサインしました。

「防災科学教室」は、防災科研がベルマーク運動参加校に研究者を派遣し、地震や豪雨、雪崩など自然災害の仕組みや危険回避の方法を学びます。防災科研からの提案で、財団の「教育応援隊」の一環として、今年度は全国の10余校で順次開催します。

防災科研の林理事長は「財団とのつながりがもてることは、研究への理解を広げる上でとても効果的」、ベルマーク財団の銭谷理事長は「災害支援の比重が年々大きくなる中、防災の知見を子どもたちに伝えてもらえるのはうれしい」と話しました。



ベルマーク財団の銭谷眞美理事長(左)と防災科研の林春男理事長

マヨネーズのことならお任せ!

キュピー「マヨテラス」を見学



(左)マヨテラスの外観
(右)マヨネーズドームの入り口

マヨネーズの歴史やおいしさの秘密などが学べる、協賛会社キュピー（ベルマーク番号07）の「マヨテラス」を、7月に財団職員が見学しました。

東京都調布市の京王線仙川駅から、甲州街道沿いに少し西へ歩いたところに、空からだ六角形に見える不思議な建物「仙川キューポート」があります。同社の研究施設等が入っている建物です。その六角形の1階の2辺が「マヨテラス」。完全予約制で、平日に1日3回（1回25人まで）、各90分の見学を受け付けています。コミュニケーターと呼ばれるガイドが案内します。



建物中に入ると、まずは明るい「サラダホール」。白い床はお皿を、置かれたソファはトマトやカボチャ、ブロッコリーなどの野菜をイメージしているとのこと。そう教えてくれたのは羽生田雅子さん。昨年11月からコミュニケーターをしている笑顔の素敵なお方です。

ホールの右手は、マヨネーズやキュ

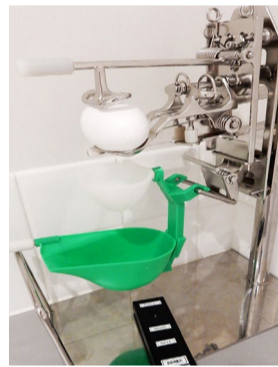


ピーの歴史を学べるギャラリーです。マヨネーズという言葉の語源は、スペインの港町、マオン。18世紀中頃にフランス人リシュリュー公爵が町の食堂で出会ったソースのおいしさに感激して広めた際、「マオンネーズ（マオンのソースという意味）」→「マヨネーズ」となったようです。そのマヨネーズにアメリカ留学中に会い、1925年（大正14年）日本で初めてマヨネーズの製造・販売を始めたのが、キュピーの創始者・中島董一郎でした。ギャラリーでは懐かしい過去のCMなども見ることができます。

ギャラリーの反対側にあるのが「マヨネーズドーム」。赤いキャップのマヨネーズ容器を横にした形で、通常のボトル（450g）の50万倍の大きさとのこと。星形の絞り口から中に入り、マヨネーズのおいしさの秘密や工夫についてのお話を聞きます。キュピーでは世界のいくつかの国でマヨネーズを製造し、販売して

いますが、国ごとにボトルの形やデザインが異なるそうで、色んな言語でパッケージされた実物が展示されていました。

ホールの正面には「ファクトリーウォーク」。最初の通路では、いきなり両サイドからシュッと強風が。ここは工場をイメージしており、体に着いたゴミを取り除くためのエアシャワーです。タマゴを割ったり原料を混ぜたりする工夫や、キュピーマヨネーズには使用しない白身・殻の利用法などが学べます。



ギャラリーの奥にはキッチンがあります。見学者は、ここで実際にマヨネーズとサラダの試食ができるため、人気のコーナーです。また育児食の講義を行ったり、小学校の自由研究向けに研究員が話をしたりなど、様々なイベントも開かれています。

建物の敷地には、別棟で「キュピーショップ」があります。同社の製品やキュピーグッズ類などを買えるほか、長寿番組「キュピー3分クッキング」の模型展示コーナーや、オープンテラスにカフェスペースもあり、ゆっくりとく

つろいで楽しめます。

「マヨテラス」のある仙川には、昔はキュピーマヨネーズの工場がありました。筆者は子どもの頃、仙川に住んでいたのですが、当時、甲州街道の向かい側には栄太郎館の工場があり、キュピーと栄太郎は地元の2大工場として有名だったことを覚えています。その後キュピーの工場は老朽化などもあって2011年に操業を終え、跡地に建ったのが「仙川キューポート」。その一角に「マヨテラス」がオープンしたのは2014年6月で、今年で開設5年目に入っています。ちなみに栄太郎の工場も2013年に八王子に移転しました。

「マヨテラス」の見学はネットか電話（03-5384-7770）による予約が必要です。ネット予約はHP（<https://www.kewpie.co.jp/mayoterrace/>）の「予約」のところをご参照ください。一般向けの駐車場はなく、来訪する際は公共交通機関をご利用ください。



おむすびコーナーに新回収箱

ファミリーマート、デザインを一新して設置

協賛会社のファミリーマート（ベルマーク番号23）が、店頭用の回収箱のデザインを一新し、店舗のおむすびコーナーに設置することになりました。

ファミリーマートのおむすびにベルマークがついていることを、来店された方にわかっていただきたい、またイトインコーナーがある店が増えてきているので、その場でベルマークを箱に入れてもらえれば、というのが狙いだそうです。箱は投函口を大きくして、お客様がベルマークを入れやすいように工夫したとのことでした。

写真の通り、箱の片側には「おむすび全品にはベルマークが付いています」という文字が、大きなベルのマークとともに飾りつけられていて、店頭でも目に留まりやすいデザインです。ファミリーマートに行ったら、おむすびコーナーをチェックしてみてください。

また、ファミリーマートが募集している「ありがとうの手紙コンテスト」の締め切りは10月1日（消印有効）です。小学生に、日頃の「ありがとう」の気持ちを書いてもらうコンテストで、感謝を伝える相手は人でも動物でも物でも構いません。同社のHPでは、池上彰さんを始めた審査員からのメッセージや、過去の受賞作品などを見ることが出来ます。問い合わせは0120-611260へ。

みんなで
ちよきちよき



コツコツ頑張って、大台達成しました

山口県下関市立豊浦小 1100 万点

山口県下関市の中心部から北東へ約 8km、江戸時代に長府藩 5 万石で盛えた城下町に、同市立豊浦小学校（井上成人校長・児童 901 人）はあります。周囲は今も古い街並みと神社・仏閣が残り、当時の武家屋敷の練塀は市の有形文化財です。今年 2 月、累計点数が県内で初めて 1100 万点を超えました。参加 56 年・154 回目の送付での達成です。



同校では PTA のことを育友会と呼び、ベルマークは厚生部が担当しています。月初めの「ベルマークの日」に回収したマークを、各クラスの厚生部の委員が家庭で会社別の袋に仕分け、枚数と点数を記入します。

全体集計は学期に 1 回、隣接する教育資料館で行います。毎回、ほぼ全員の委員が参加し、真剣に集中して作業します。厚生部長の谷口真弓さんは「皆で助け合って活動しているので充実感があります。仕事をしている方が多いので、少しでも負担を減らせるように工夫しながら続けていきたい」と話してくれました。

昨年度の部長を務めた篠田美千代さんによると、豊浦小はベルマークに意欲的な家庭が多いそうです。「先生方や学校を訪れる保護者がいつでもマークを入られるよう、事務室の前に回収箱を置いています」。



児童の関心を高める工夫も。毎月各クラスの一人平均の枚数を校内放送で発表するほか、学期ごとにマークの枚数を多く集めたクラスを表彰しています。また毎年 11 月の「とよら祭」では、マーク 5 点で 1 回くじを引ける「ベルマークくじ」コーナーを設けているそうです。こうした活動の成果として、昨年度は目標だった運動会の優勝旗を購入できました。

育友会の活動について井上校長は、「大規模校なので集まるマークも多く、整理が大変だと思いますが、いつも熱心に活動して下さっています」と感謝を語りました。



鹿児島県指宿市立丹波小 700 万点

1970 年 7 月にベルマーク運動に参加した鹿児島県の指宿市立丹波小学校（川上哲博校長、児童 535 人）が今年 2 月、県内で初めて累計 700 万点を達成しました。財団にマークを送った回数は計 133 回、1 回平均 5 万点余りになる計算で、地道に、着実に点数を積み上げた結果だといえそうです。



JR 指宿駅で、授業の一環として手作りの観光パンフレットを配っていた丹波小の子どもたちが、学校まで案内してくれました。榊宏三教頭先生のお声かけで、PTA 厚生部の昨年度部長・東明代さん、同副部長の山口晴奈さん、今年度 PTA 会長の池増慎吾さん、同副会長の北蘭ゆう子さんに集まっていたいただき、話をうかがいました。

厚生部は月 1 回集まってマークの仕分け・集計作業をし、学期毎に発送します。保護者間のコミュニケーションの場として厚生部は人気だとのこと。活動を経験した人の意識は高く「冷蔵庫に一覧表を貼り、買い物ではベルマークのある商品を探します」。各クラスのサッカーボールや家庭科で使うアイロン、体育館のマットなど、マークで買ったものもたくさんあるといえます。



昨年度は協賛会社のスミフルジャパン（ベルマーク番号 70）のキャンペーンに当選。もらったバナナを使い、秋の PTA のバザーで「ベルマークを持ってきたらバナナをあげます」というイベントを開きました。バナナについているマークも含め、かなりの点数を集めることに成功したそうで「きっと、それが 700 万達成に最後に役立ったのでは」と東さんたち。



池増さんは「取材を受けて 700 万点という価値を理解できました。丹波小のベルマーク運動が今後も発展するよう、これからも協力してやっていきたいです」と話してくれました。

池増さんは「取材を受けて 700 万点という価値を理解できました。丹波小のベルマーク運動が今後も発展するよう、これからも協力してやっていきたいです」と話してくれました。

川崎市立菅小学校 800 万点

校門に「ありがとうのバトンをうけつぎ、未来へむかって進もう菅っ子」というパネルがある神奈川県川崎市立菅小学校（戸塚裕康校長・児童 862 人）。創立 140 周年記念で作られたそうで、今年で 142 年という伝統校です。1964 年からベルマーク運動に参加し、今年 2 月に累計点数 800 万点を超えました。



7 月の全体集計日。午後 1 時、PTA ベルマーク委員会の委員長・八木澤恵美さん、副委員長の榊原周子さん、ベルマーク担当本部役員・杉本悦子さん、応援に駆け付けた PTA 会長の木村徹さん、さらに各クラス 1 人ずついるベルマーク委員の皆さんが集まり、作業を始めます。

回収月は年 7 回。委員が自クラス分を家庭で事前集計して持ち寄ります。全体集計では封筒や紙コップを使ってそれをまとめ直し、ダブルチェックも欠かしません。回収箱は近隣スーパーにもあり、「思っていたより回収量が多く、地域の人の協力で成り立っていることを知って驚いた」という声が挙がるほどだそうです。作業が進むうちに、授業を終えた「菅っ子」たちがお母さんの仕事の様子を見にきました。

活動について八木澤さんは、「歴代の先輩たちが残してくれた資料はあるが、どんな方法がいいのか模索中」。また榊原さんは「家庭で事前集計できるほど、学校全体がベルマーク収集に協力的です」と周囲への感謝を口にしました。



昨年度委員長を務めた伊達絵美さんは、800 万点達成について「協力いただける全ての方々の善意で成り立つ活動なので、負担を少しでも減らせるように心がけた」とコメント。また同副委員長の糟谷由美子さんは「へき地校や災害被災校への支援にもなる、やりがいのある活動だと思うので、今後もコツコツ続けていきたいです」と語ってくれました。

「西日本豪雨」被災校への支援をお願いします

ベルマーク「友愛援助」&ウェブベルマーク「くじ付き募金」など

7月の西日本豪雨の被災校を支援するため、ベルマーク教育助成財団は緊急の友愛援助を引き続き募集しています。

友愛援助は、ベルマーク預金を使って直接資金を寄付することができる仕組みです。今回の豪雨では、浸水被害を受けたり、校舎が避難所として使われたりして、休校を余儀なくされた学校も多く、また自宅が被災して学用品を失った子どもたちもいます。厳しい環境に置かれた子どもたちに、どうか温かい支援の手を差し伸べてください。

協力していただける学校・団体は、財団ホームページの「ダウンロード」→「各種申込書」にある申請書に必要事項を記入して財団までお寄せ下さい。今年 12 月末まで受け付けます。

また、一般社団法人ウェブベルマーク協会も西日本豪雨被災校への緊急支援活動を始めています。

ウェブベルマークのホームページを経由してネットショッピングをすると、東日本大震災被災校への支援ができ、同時に自分が指定した学校にもベルマーク

点数がたまる——これがウェブベルマークの仕組みです。その学校指定機能に「西日本豪雨支援」という項目が追加されました。「広島市」「倉敷市」「宇和島市」の各小学校を検索すると、リストの最後に出てきます。マイページ登録時にこの項目を選べると、支援金はベルマーク財団に助成され、被災校全体のために使われます。すでにマイページ登録をしている方は「登録情報変更」から同様に「西日本豪雨支援」を選択してください。今年 12 月まで受付予定です。

またウェブベルマーク協会は、西日本豪雨の被災校に向けて、くじ付きのネット募金もしています。「Yahoo!ネット募金」を通じて、クレジットカードまたは T ポイントで 1 円（1 ポイント）から寄付できます。10月31日の受付終了までに寄付された方の中から、抽選で 1 名に Samantha Thavasa のトートバッグ「サマンサ レディマイン」（株式会社サマンサ タバサジャパンリミテッド提供）をプレゼントします。詳しくはウェブベルマークの公式ブログで。

「えっ、なんで？」不思議いっぱい理科実験教室

岐阜・上原小でエジソンの会が開催



(写真右) 終始目を輝かせていた子どもたち
(写真左) 液体窒素をつめたんだね！

岐阜県下呂市立上原（かみはら）小学校（栃本勝美校長）で8月27日、NPO法人サイエンスものづくり塾エジソンの会（華井章裕代表、岐阜市）による実験教室が開かれ、1～6年生の全校児童46人が参加しました。「理科実験教室」は財団によるへき地校支援の一環で、1999年度から昨年度まで221回開いています。

エジソンの会は、小学校の元PTA役員仲間、2004年に結成。現在20人ほどで活動し、6月には学校での理科実験教室1000回を達成しました。代表を務める華井さんは高校教師として30年ほど前に下呂市で勤務しており、上原小の先生の中にも元教え子がいます。



まずは、細長い風船を使った手品からスタート。軽く飛ばすと1、2秒後に

空中でパンと割れました。「どうやって割ったの？」「針を持っているのかな」。繰り返すうち、前の方に座っていた子が「みかんの匂いがする！」。ゴムを溶かす性質がある柑橘油を、風船を飛ばす直前に塗っていたのでした。



三寸釘600本の上立つ実験などを経て、この日のメインの、マイナス196度の液体窒素を使った実験です。花や葉を浸して手で軽く包み込むと、簡単に粉々に崩れます。「わあ～パリパリ！」「つめたーい」と児童は大はしゃぎ。

誰もが一度は憧れる「凍ったバナナで釘を打つ」実験もありました。続いて、酸素を入れた風船を液体窒素に浸します。「割れる・コチコチに凍る・しばむ・膨らむ……さてどうなるでしょう？」。

正解は「しばんでから、外に出すと膨らむ」でした。二酸化炭素を入れた風船なら、「しばんで膨らむ」のは同じで

すが、中にドライアイスができます。「ドライアイスは手にくっつくから触っちゃだめって言われた事があると思うけど、本当は凍りません」と華井さん。「えっなんで？」と、子どもたち。実際に乾いたティッシュに触れさせるとパリパリにならずにそのままです。「水分がないと凍らない」ことが分かりました。

華井さんは、「なんで？」と聞かれても「今はまだ分からなくてもいいよ」とあえてすぐには答えを教えません。「低学年だとまだ習っていない事も沢山あり、後で学んだ時に『あの時実験した事はこれだったんだな』と思い出せるのが重要。幼いうちは楽しい実験を通じてその種をまくことが大切です。」



第二部はワークショップ。細長いカラーテープを回すとき綺麗な色になる



「くるくるレインボー」、風船とCDを使った「ホバークラフト」を作りました。

上原小は、保護者をはじめ地域の人たちが子供会などに協力的で、「地域で子供を育てる」意識が強いそうです。ワークショップでも上級生が下級生を手伝う場面が見られました。

最後に6年生の女子が「やってみたい事が色々できて、いろんな作品を作れてみんなで楽しめました」とお礼の言葉を述べて教室は終了。栃本校長は「子供が自分で勉強しようと思うのは『なんでだろう？』と不思議に思った時。子供の学習意欲を高めるチャンスをいただき有り難いです」と話していました。

上原小は1982年からベルマーク運動に参加し、竹馬や一輪車などを購入して授業で活用しています。

「メリットは？」「昔のマークって…」「頭が爆発！」

自由研究で小学生の財団見学相次ぐ

自由研究のため財団を見学に来る小学生が8月も相次ぎ、マークの集まる倉庫や点検作業などを見学してもらいました。成果はどうだったかな？

東京都新宿区立市谷小学校5年の小川真優（まひろ）さんとお母さんの未香さんは10日に財団を訪問。「ベルマーク運動は、財団にはどんなメリットが？」と、ドキッとするような質問を考えてきました。財団からの回答は「子どもたちの笑顔に出会えることが一番うれしいことです」。真優さん、満足してくれましたか。

市谷小には一輪車があるので、「きっとベルマークで買ったのでは。誰かの努力で結果が出ていることを、色んな人に知って欲しい」と真優さん。未香さんも「こういう活動は、もっと広がっていかねば」と思いを新たにしていました。

川崎市立生田小学校4年の大沼智紗さんが、祖母の教子さんに連れられてきたのは24日。お母さんがPTA



でベルマークの作業をしていたのがきっかけで、自由研究のテーマにベルマークを選んだそうです。

事前に「昔のマークを見せてほしい」というご要望があり、職員が用意したのは、財団が「教育設備助成会」だった時代のマーク。今と違ってベルマーク番号が書かれておらず、ベルの絵柄のないものもあります。智紗さんは「ベルマークのひみつ」という本で予習してきたそう。貴重なマークをカメラに収めようと真剣でした。たくさんの資料を受け取り、「思っていたより財団の仕事は大変だった。それを発表したい」と話しました。

東京都中野区立谷戸小学校5年生の鈴木烈さん、岩崎美和さん、赤間千聖さん、野村杏樹さんと母親の野村しのぶさんは、8月29日に財団へ。自由研究とは別の夏休みの課題「施設見学のレポート」を書くためです。し



のぶさんはPTAで仕分け作業の経験があり、谷戸小は昨年ベルマークで校旗を買ったそうです。

4人は倉庫で都道府県別の箱にベルマークを整理するお手伝いもしましたが、「この部屋の中にベルマークが何点ある？ ヒントは3月の一番多い時で1億2000万」と逆に質問されドギマギ。正解は約6800万点でした。財団としては少ない時期なのですが「それでもこんなにあるなんて」とびっくり。ベルマークには協賛会社など多くの人に関わっていることも発見だったので「大変そう」「私だったら頭が爆発しそう」と素直な感想が漏れていました。

このほか、7月には、ベルマーク説明会の八王子会場で発表を引き受けていただいた神奈川県相模原市立久沢小のベルマークボランティア「ベルベルぐみ」のお母さんのうち4人も財団見学に来てくれました。



遠くの被災地に支援の手を

かごしまベルマーク運動推進の会ルポ

鹿児島市の中心街にあるかごしま市民福祉プラザの4階、ボランティアセンターに、小学生からお年寄りまで28人が集まりました。かごしまベルマーク運動推進の会のメンバーです。第二土曜日の午後、ここでマークの仕分け・集計作業をしています。7月13日、その活動を見学に来ました。

会の代表がベルマーク大使でもある平嶺光子さんから10代の4姉妹に交代し



て最初の会合でした。冒頭、新代表のうち板坂麻菜華さん、ありささんが、あいさつに立ちました。「6年前から活動しています。東日本大震災の1年後に現地を訪れて、いろいろ学びました。遠い鹿児島からでもボランティアができると知って活動を始めました。離れたところからでも、誰でも参加できるのがベルマーク運動。がんばって行きたいです。目標は、鹿児島市民1人1点として、60万点です」と麻菜華さん。

ベルマーク大使でジブラルタ生命の松本哲さんも応援に駆けつけました。土曜日のボランティアセンターは他に人も少なく、広いロビーにある机をほぼ全面的に利用できます。みな、思い思いのグループに別れて作業を始めました。

使っている道具をよく見ると、どこか見覚えのある形。「そう、これは豆腐のパックです。あっちはかき氷」と説明してくれたのは清原久子さん(75)。東日本大震災の報道で津波に車が流されていく映像を見て、1993年に地元・鹿児島で起きた水害の記憶と重なり、何かでき

ないかと思ったそうです。「そんな中、新聞で会の活動を知り、これだ!と思うて飛びついた」と話してくれました。

隣にいた川原テルさん(73)も、そう思った1人。「活動の案内が新聞にその都度載っている。継続的でしっかりした団体だと思い、参加しました」。

黙々と続く作業は、1時間ほどで小休憩に。お茶とお菓子が用意されました。お菓子は、チョコにクッキー、おせんべと種類も豊富でおいしそう。バザーなどで稼いだ資金で買うほか、いただきものもあるとのことでした。

そのころになると、板坂菜々乃さん、茉莉菜さんも姿を見せ、4姉妹が勢揃い。地元紙の南日本新聞の記者も取材に訪れ、4人にインタビューを始めました。この取材は後日、同紙で大きく報道され、平嶺さんのもとには問い合わせ電話が朝から入り続けたそうです。

4姉妹は松本大使とも対面。平嶺さんも加え、2人の大使と4姉妹が財団マ



スコットのベルマークと一緒に写真を撮らせていただき、財団公式Instagramにアップしました。

姉妹のお母さんの板坂朋子さんによると、いちばん下のありささんが初めて会に参加した帰り道、「あー、小数点習っていて、よかったー」と話したことが印象深く残っているそうです。当時ありさんは小学4年生。習ったばかりの小数点を使えて充実感を持ったのでしょう。「それ以来、みんな『楽しい』と、ずっと参加させてもらっています」

この日、お母さんたちときた6年生

豪雨禍の広島に1万点寄贈

キューアンドエー株式会社が収集・仕分け

笹塚にあるキューアンドエー株式会社(川田哲男社長、本社・東京都渋谷区)本社の会議室に7月のある日、ベルマークの入った袋が積み上げられました。

コールセンターやICT(情報通信技術)サービス、人材派遣事業などを展開している同社は、創立20周年の記念事業として昨年2月から、全国の事業拠点とグループ会社の社員3000人にベルマーク収集を呼びかけていました。その仕分け作業が始まるのです。



「同じ会社でもマークが何種類もあるんですね」「デザインが違って、点数が一緒なら分けなくて良いんですか?」「きれいに切り直した方が良いでしょうか」……。皆さん熱心に質問しながら、手際よく作業を進めます。

初めての作業にも関わらず、会社ごとに用意した紙コップは1時間でいっぱいになりました。広報担当の大野香穂里さんは、「種類が多くて難しいイメージがありましたが、思っていたより早く仕分けできました」と話してくれました。

今回一番多く集まったのはファミリーマートのおむすび、2位はキリンビバ

レッジの生茶でした。来客用のお茶を生茶に切り替え、社内の自販機の隣にハサミと回収箱を置いた結果、回収率がかなり上がったといいます。川田社長もペットボトルのラベルを自らはがして必ず集めているそうです。

ベルマーク運動担当の副社長・常務秘書の山田有子さんによると、ファミマのおむすびを毎日食べてコツコツ集めてくれた人、保険証券など目につきにくいマークをわざわざ探して送ってくれた人もいたそうです。「豪雨災害に遭った広島の実業拠点からもベルマークを通じて役に立ちたいという声があがりました。仕分けたマーク(約1万点)は広島県立広島南特別支援学校に寄贈されました。「近隣にはオペレーションセンターもあり、地域に密着した貢献を、と選びました」。



ベルマーク運動を取りまとめるリレーション・ブランディング戦略本部の部長で執行役員の安達あけるさんは、「誰でも気軽に取り組めるのがベルマークの良いところ。今後も全国の子どもたちの役に立ちたい」と思いを込めました。

の川島陽樹(はるき)くんは、今回が5回目の参加。お手伝いとして始めたけれど「楽しい。ひとつのことを頑張るところがいい」。一緒に来ていたお姉さんの中学2年、由奈さんは「集めていたベルマークが、その後はどうなるのかなと興味がわき、会に参加するようになりました」と話してくれました。



天然地下水で洗ったバナナ スミフルが新発売

協賛会社のスミフルジャパン(ベルマーク番号70)が、より安全・安心を求めるお客様向けに、天然地下水で綺麗に洗浄した「メキシコ産 有機栽培バナナ」の販売を始めます。

このバナナは、食品安全の総合的な「適正農業規範(GAP)」や、森林の維持保全、貧困の緩和といった基準を満たし、認証を取得した農園で作られています。禁止農薬や化学肥料を使わずに栽培し、収穫後に天然地下水で洗浄。使った後の水は畑にある池に貯め、灌漑用水として再利用するなど、持続可能性に配慮したバナナです。3点のベルマークがついています。

他に「メキシコ産 熟撰おいしいバナナ(ベルマーク1.5点)」も同時発売しました。商品情報は同社HPから。



ベルマーク財団からの今年度の学校支援

ベルマークを集めて学校の備品を買うと、その金額の10%が教育環境に恵まれない学校への支援資金になります。ベルマーク財団は、この資金や各種寄付金、寄贈マークなどを使って、今年度も国内外のさまざまな学校に対しての支援事業を実施しています。

【国内】東日本大震災被災校=岩手・宮城・福島3県の小中学校に計1020万円相当の教育備品やバス費用を支援▽西日本豪雨被災校=被害を今後調査して実施▽へき地学校=100校に希望の備品・教材(1校30万円相当)と朝日ジュニア学習年鑑を贈呈。一輪車と理科実験の出前教室を計14校で予定▽特別支援学校=58校に希望の備品・教材または拡大読書器かプロジェクター▽院内学級=4学級にタブレットなど

【国外】日本人学校・補習校=4校に希望の備品・教材▽アジアを中心とした開発途上国=保健教育活動、給食プログラム、図書室や寺子屋の開設など、国際NGOが進める9事業を支援

ベルマーク便りコンクール 締切迫る(9月30日)

第33回ベルマーク便りコンクールの締め切りが9月30日(消印有効)に迫ってきました。応募すれば、もし受賞を逃したとしても、参加賞として2000円の図書カードがもらえます。ぜひご応募ください。

【応募方法】家庭や子どもたち、地域の人たちに向けた、ベルマークの収集や活動への協力を呼びかけるお知らせや新聞、広報紙をお送りください。特集号や冊子なども含め、過去1年以内(2017年10月1日~2018年9月30日)に製作されたものが対象です。サイズや、カラーか白黒かは問いません。年間の活動状況がわかるように、なるべく多くの作品をお送りください。肖像権や著作権上で問題となる可能性がある内容については審査の対象外となる場合があります。

【あて先】〒104-0045 東京都中央区築地5-4-18、ベルマーク財団「ベルマーク便りコンクール係」

【賞金と参加賞】優秀賞10点に各3万円と副賞として額入り表彰状、佳作10点と特別賞には各1万円と額入り表彰状を贈呈。11月に財団HPで発表します。

